

<b>目次</b>	<b>■第16回年次大会特集</b>	<b>2</b>
	大会を振り返って…2 基調講演…3 プレカンファレンス…5	
	パネルディスカッション…6	
	英語プレゼンテーション・ワークショップ…7	
	ラウンドテーブル・ディスカッション…7	
	学際シンポジウム…8 石井奨励賞審査結果…9	
	<b>■第17回年次大会（第1報）</b>	<b>10</b>
	<b>■地区研究会報告</b>	<b>11</b>
	関東…11 中国・四国…13 九州…14	
	<b>■2017年度理事会議事録抄録</b>	<b>15</b>
	第2回理事会…15 第3回理事会…17	
	<b>■お知らせ</b>	<b>19</b>
	地区研究会のご案内…19 Web管理・広報委員会より…20	
	学会誌編集委員会より…21 学術委員会より…22	
	事務局より…22 新入会員紹介…23 会員新著紹介…24	
	NL委員会より…24	
	<b>■編集後記</b>	<b>25</b>

<b>CONTENTS</b>	<b>■Report on the 16<sup>th</sup> Annual Conference on Japan Society for Multicultural Relations</b>	<b>2</b>
	Overview of the 16th Annual Conference on Japan Society for Multicultural Relations…2 Keynote Speech…3	
	Pre-conference…5 Panel Discussion…6	
	English Presentation Workshop…7 Round Table Talk…7	
	Interdisciplinary Symposium…8 The Ishii Yoneo Award…9	
	<b>■JSMR 2018 Annual Conference</b>	<b>10</b>
	<b>■Reports from the Regional Study Meetings</b>	<b>11</b>
	Kanto…11 Chugoku・Shikoku…13 Kyushu…14	
	<b>■Records of the 2017 Board Meetings</b>	<b>15</b>
	<b>■Announcements</b>	<b>19</b>
	Announcements on the Regional Study Meetings…19	
	From the Web Committee…20	
	From the Journal Editorial Committee…21	
	From the Academic Affairs…22 From the Business Office…22	
	Introducing New Members…23 New Publications…24	
	From the News Letter Committee…24	
	<b>■Editor's Notes</b>	<b>25</b>

## 多文化関係学会第16回年次大会（於北海道）を振り返って

第16回年次大会委員長 伊藤 明美(藤女子大学)

「多文化共生社会への道—記憶・課題・展望—」のテーマのもと、札幌で開催された第16回年次大会は、多くの会員の皆様のご協力とご支援をいただきながら、無事、3日間の日程を終えることができました。この場を借りて深くお礼申し上げます。ありがとうございました。

北海道開催ということで、ご参集いただける会員の数に不安もありましたが、終わってみれば、参加者は当日参加を含めて60人を少し切る程度、発表件数も前年度並みとなりました。また、懇親会にいたっては参加者全体の8割近くの方々にご参加いただくことができました。大会後にWeb上でご回答いただいたアンケート結果も全体的には好評で、心から安堵した次第です。ただ、シンポジウムやパネルディスカッションではフロアとのディスカッション時間がやや短かった等、次回以降の大会運営に生かすべき貴重なご意見もいただきました。感謝申し上げます。

さて、（おそらくは会員の方々の日ごろのご努力のお陰で！）今回の大会は多くの幸運に恵まれました。まず、第一に天気です。8月に発表された長期予報では、9/8（金）からの3日間は「大気不安定の注意すべき週末」でした。冷たい9月の雨が降っては参加者の皆さまに申し訳ないと、1か月近くハラハラしながら過ごしましたが、会期中はむしろ暑いくらいで、参加者の中には一日中ノースリーブで過ごされた先生までいらっしゃいました。また、本大会は例年に比べてかなり早い時期での大会となりましたが、上記アンケート結果からは9月初頭が最も「人気」であることもわかりました。また、なにより、もし、1週間後にずれこんでいたら台風18号

が上陸していますので、「帰宅困難者」が出た可能性もあります。しかも、その週の金曜日には、北朝鮮から発射されたミサイルが北海道根室沖に落下しています。本大会で企画した東アジアの関係を考えるシンポジウムの意義を再確認しつつも、運の良さを感じずにはいられませんでした。

本大会のどこかで、旧蝦夷地が日本の一部となる過程で起こった忘れてはならない経験、そして北海道や日本における多文化・多民族共生社会をめぐる課題と今後について思いを馳せていただきましたなら、これほど嬉しいことはありません。基調講演をお願いした佐々木史郎先生も、2020年に白老（しらおい）という町に設立される「国立アイヌ民族博物館」の開館準備で忙しくお過ごしのことと存じます。再訪の機会がありましたら、ぜひ、こちらにもお運びいただき、アイヌと和人の交流に対する理解を深めていただければ幸いです。

最後になりますが、札幌にいらっしゃることがあれば、ぜひご一報ください。大会ではご案内できなかった札幌市内の観光スポットや四季折々の美味しい食事をご一緒しましょう！



## 基調講演

### 「北方世界の多文化的状況-近代前夜のアイヌ民族と近隣諸民族との交流-」

【講師】佐々木 史郎 氏（東京国立博物館/国立アイヌ民族博物館設立準備室主幹）

【コーディネーター】御手洗 昭治（札幌大学）

基調講演では、国立アイヌ民族博物館の2020年開館に向けてご尽力なされている佐々木史郎先生より、北東アジア史の枠組みからアイヌを再考するお話を賜りました。佐々木先生は、例えばアイヌ政策であればそれが現地の人にどのような理解のされ方をし、いかなる影響を受けているか、人びとと一緒に生活する中から肌で感じ取る文化人類学的視点を大切に研究を続けて来られました。今回の講演では、明治政府による開拓政策が始まる前のアイヌの人びとの姿を、日本史の中の北方史ではなく「北東アジア史」の枠組みで見直すことによって、近代以前のアイヌの人びとの多角的な歴史像についてお話いただきました。

佐々木先生の長年にわたるご研究に基づいたお話は、多文化間の関係を考える上で多くの示唆を与えて下さいました。中でもアイヌ民族について新たな理解を得た一番の点は、かつて北の地に存在していた活発な民族間の交流と交易ネットワークが、日本・ロシア・中国の国家としての発展や互いの間の関係性により変化し、再構築されていったことであり、それに伴いアイヌの位置づけや役割も変化してきたということです。

まず佐々木先生は、海峡や川といった「水」とは、その周辺に住む集団を分断するのではなく結ぶものである、つまり分けるための境目ではなく架け橋であることを強調されました。分けるのはむしろ山であり、当時は徒歩や馬よりも船の方がより早く、大きな荷物を運びやすかったのです。樺太、サハリン、アムール川などの近辺では水の周りに似たような集団が住んでいたというのがこの地の特徴でした。そこに民族間の交流があり、交易ネットワークが存在していました。樺太、千島列島は、アイヌ民族の領域(アイヌモシリ)の中では「辺境」の部類に入り、農業や植物性資源に

おいて不利な生態環境にありましたが、特産物を生かした交易を盛んに行うことによって、その逆境を先進的な文化や社会の形成へと転換していました。アイヌ民族は、前近代的王朝・封建国家の時代の日本・ロシア・中国をつなぐ中継役として重要な役割を担い、強い力を持っていたと考えられます。

これだけの歴史のあったアイヌを現在の位置づけへとおとしめた背景に、近代国家の成立があったと佐々木先生は考えています。明確な差別や階級差の存在した前近代的な時代には、支配者層による恣意的な規定、移動・移住の制限、地元民による開発の重視といった背景があり、そのことがアイヌ民族に特権を与え保護をもたらすことへとつながっていました。ところが、ほぼ同時期に近代国家になろうとしていた日本とロシアは、それまで国境の存在していなかった樺太で1850年代に領土をめぐるぶつかり合い、1875年の樺太千島交換条約によって樺太アイヌを分断し、そのうち841人を北海道へ強制移住させました。これによってアイヌ民族は「先住民族へとおとしめられることになった」と佐々木先生は言います。近代国家には法の下に国民の平等があり、移動・移住制限も撤廃され、差別は法的に禁止されるようになりました。しかし北海道開発の中で地元民は軽視され、そこから多数派である移民に対して「少数派」「先住民」のアイヌという構図ができ、差別が助長されたのです。近代国家の成立によって法が差別を禁じるようになった代わりに、建前上の差別はないものとしながらもアイヌを二級民として見るダブルスタンダードができ、アイヌの権利もどんどんはく奪されました。つまり、前近代的な時代の階級的差別や分離がアイヌ自身による地元開発や独自性を守る結果となっていたのに対し、近代国家の法による表面的な平等は、権利はく奪と蔑視を招いたとすることができるでしょう。

かつては、水を媒介とした交易ネットワークの中で、水の周辺の人たちは互いに交流しあうことはあっても孤立した存在でした。しかしそれらの民族集団がまとめられ「大きな集団」となり国家が出現したときに、アイヌ民族は「周辺化」されました。さらに「国境」によって分断されたことによって「未開人」として位置づけられました。そうやって、より大きな力のある集団を中心としたときに、その外側に置かれた力のない者としてアイヌを見る視点ができあがったのだという佐々木先生の主張が印象に残りました。

佐々木先生のお話は、地域とそこに住む人びとを全体としてのシステムの中で捉えており、地政学的、経済学的な観点も見いだせる点が特に興味深く思われました。かつて北の地には海や川でつながりあう土地の利を生かした商業圏があったこと。そしてそこにネットワークの点と点をつなぐという立場で、中国や日本を仲介し利益を生み出して発展していた力強いアイヌ民族の姿のあったことを思い描くことができました。しかしその後を語る時、アイヌは「おとしめられた」という表現が講演の中で度々出てきたので、その意図を知りたいと思い、本稿を書くにあたってお尋ねしてみました。佐々木先生には、近代国家がアイヌをはじ

めとする北方地域の元々の住民の社会的地位を故意に落としていた可能性のあることを示す意図があったそうです。覇権のために「未開の少数民族」に「おとしめる」必要があったならば、逆に言うとその程までにアイヌは脅威となり得る存在であったとも言えます。

いわゆる「かわいそうなアイヌ」とは、比較的最近になってから、つまりアイヌとしての存在を制限され、土地や生活など自分たちの尊厳や権利を奪われてからの姿に基づいたイメージでしかありません。主体性や本来性を発揮できない状況に置かれた後の姿だけを見てアイヌとしてしまう眼差しもまた、アイヌの人びとを「おとしめている」ことにはならないか。現在見えている部分だけで理解するのではなく、過去の周辺の集団との関係性の中から、互いに影響を与え合い取り入れ合いながら形成されてきた歴史的な産物として理解することの重要性について考えさせられました。交易ネットワークの主要な担い手として活躍し発展していた力強く豊かな姿も合わせて想像し、推論することで、アイヌの人びとの違った側面に気づくことのできた講演でした。

報告者：山本 志都（東海大学）



## プレカンファレンス 「北海道における民族交流と多様性、その原点を探る」

(於:北海道博物館)

【コーディネーター】伊藤 明美 (藤女子大学)

### 「蝦夷地のころ:アイヌ民族と和人の交易」に参加して

プレカンファレンスは、北海道博物館において開催され、前半が講義、後半が博物館見学という2つのパートに分けられた。

前半の講義は、北海道博物館の研究部歴史研究グループ職員である東俊佑氏により、13世紀から19世紀前半頃の北海道の歴史の流れが語られた。まず、「アイヌ民族」、「縄文人」、「和人」などの概念についての説明があった後、北アイヌ民族のサハリン進出と同時に和人の夷島進出も進んでいた13世紀頃の話、松前藩の成立、有名なシャクシャインの戦い、クナシリ・メナシの戦いなど、蝦夷地の歴史について説明してくださった。中でも、印象深かったのは、1604年に松前家が、徳川家康から松前藩以外の者が主導的にアイヌと交易することを制限する黒印状が与えられた話である。こうして和人によるアイヌ社会への圧迫は次第に強まり、最終的にアイヌ民族は自由な交易活動ができなくなった。この黒印状は、松前藩による蝦夷地領有を決めた重要な史料として、北海道博物館で保管されているということであった。

東氏は、2年前に北海道博物館をリニューアルする際、アイヌ文化を将来にわたって大事に伝えたいと考えたそうである。そうした思いが反映され、リニューアルにおいては、これまでの和人視点からアイヌ民族視点へと展示方法が変わったとも聞いた。

例えば、新しい博物館では架空のアイヌの家族を設定し、小学生である「僕」が、祖父母から自分の家族の歴史を聞く、という展示を設けて、アイヌの衣食住などの文化を紹介しようとしている。しかし、北海

道の開拓史についての内容が少ないという来館者の意見も伺った。

講義のおかげで後半の館内見学では、アイヌに関する展示品をよりよく理解できたと思われる。北海道博物館は、北海道開拓記念館と道立アイヌ民族文化研究センターという2つの道立施設を統合して、2015年4月に新たに開設された。総合展示のコンセプトは「北東アジアのなかの北海道」と「自然と人とのかかわり」で、北海道の自然・歴史・文化を物語る5つのテーマに分けられている。プロローグ「北と南の出会い」に始まり、「北海道 120 万年物語」、「アイヌ文化の世界」、「北海道らしさの秘密」、「わたしたちの時代へ」、「生き物たちの北海道」へと続く。北海道の自然・歴史・文化について共に考え、語り合える場として、数多くの利用者が訪れるそうである。参加者は各自のペースで館内を見学し、現地解散でプレカンファレンスが終了した。

報告者:趙 師哲 (愛知淑徳大学)



## パネル・ディスカッション

### 「東アジアの多文化関係-負の相互イメージからの脱却は可能か-」

【パネリスト】 山谷 賢量 氏(元北海道新聞)

【パネリスト】 呉 小莉 氏(城西国際大学)

【パネリスト】 李 鳳 氏(北海商科大学)

【コーディネーター】 久米 昭元(元立教大学)

ニューヨーク・ケネディ空港で日本人から「中国の方だと思いました」と言われ、マンハッタンの五番街では中国語で話しかけられ、ヤンキースタジアムでは「あなた韓国人ですよ?」と地元の人から聞かれた。アメリカでは最初から日本人と認識されることはあまりない。つくづく私はアジアの人間なんだなと実感する。

ロシア、中国、韓国の人が日本をどう見ているのか。今回とても興味深く3人のお話を聴いた。パネリストは、モスクワ特派員としてロシアに赴任された山谷氏、北京出身で、日本在住の呉氏、ソウル出身で日本在住の李氏。それぞれのカルチャーショックの体験談は迫力がある。ペレストロイカで時代のうねりの中、監視社会と消費物資の欠如、日本の「いいです」のニュアンスや誤解、本音と建て前を使い分ける日本人のプライベートを重視する個人主義など。

負のイメージを持つ理由としては戦争による歴史認識が大きい。呉氏の「お互いに知らないから理解できない」の言葉にハッとしたり。「中国人は日本の文化は中国からきていると信じている」「日本は経済力があるからと上から目線で中国を見ている」。

世代にもよるが日本人は、食文化や漢字など中国の影響を受けて今日本の文化がここにあるのだという認識は普段あまり意識していないと思う。

お互い相手のことをよく知ろうとする、相手から学ぶ謙虚さがあれば負のイメージから少しは脱却できるかもしれない。

今回のテーマの「負の相互イメージ」に私は引かかる。確かに政治的な面では北朝鮮の核開発問題

など緊張をはらんでいる部分もあるが、「負のイメージ」と最初から決めつけてはいないだろうか。

山谷氏によると、ロシア側は日本を信頼できる重要な国であると感じている人が増えており、和食や日本の生活様式も人気があるという。

李氏もJPOPとKPOPなどすでに若者たちが文化の交流をしている、こんな良い事例もメディアで紹介すべきと言う。

朝日新聞の特派員メモ(2017年12月28日)によると、いま韓国は空前の日本旅行ブームだそうだ。日本の人気ドラマのロケ地を巡り感動する人がいる。

東アジアの多文化関係とは、大きなテーマである。メディアで報道されない小さな「文化交流」「face to faceの話し合い」がきっとあちこちで生まれていると信じたい。

「ポジティブな相互イメージ」の積み重ねが、負のイメージを小さくしていくことを願っている。

報告者: 関下 昌代 (亜細亜大学)



## 英語プレゼンテーション・ワークショップ

【コメンテーター】 Oliver Chris (Sophia University Junior College Division)

【コメンテーター】 出口 真紀子 (上智大学)

【コーディネーター】 小坂 貴志 (神田外語大学)

この度は、英語プレゼンテーション・ワークショップにて発表の機会をいただきまして誠にありがとうございました。

学会での発表はもちろん、英語でのプレゼンテーションに参加することが初めてでしたのでとても緊張しました。その上、制限時間内に今までの研究成果をフロアの皆さんに納得していただけるような研究発表ができるかどうかとても心配でした。そのため、学会発表や英語プレゼンテーションに関する情報を収集し勉強することから取り組みました。日本語と英語での発表には異なるところがあることに気づき、発表内容の構成やデザインなどを工夫しパワーポイントを作成しました。英語での発表でしたので、ネイティブ・スピーカーの友人に発表内容を添削してもらいプレゼンテーションの練習を重ねました。

英語プレゼンテーション・ワークショップの当日は、緊張のあまりプレゼンテーション中はずっと体が震えましたが、何とか制限時間内に準備した研究内容の発表ができました。発表はもちろんフロアの皆さんとのアイコンタクトにも気をつけました。発表後は、コメン

テーターの先生からパワーポイントの構成や色、デザイン、また、プレゼンテーション中のフロアの皆さんとのアイコンタクトについてお褒めの言葉をいただきまして、大変嬉しかったです。英語が得意ではないためプレゼンテーションよりも質疑応答の時間のほうで緊張しましたが、何とか理解していただける回答ができたようでほっとしました。質疑応答の時間を含め、先生方から貴重な意見をたくさんいただきまして大変嬉しく思います。

本当にこれからの研究に大変役に立つ貴重な経験ができたと思います。自分の研究の方向性や問題点などについて振り返ってみることのできる大切な時間になりました。そして分野の異なる方々からのコメントから自分の頭の中にある考えをそのまま文字化し、論理整然にまとめる力を養う必要性を実感しました。また機会がありましたら、是非とも参加させていただきたいと思います。

報告者: 安 芝恩

(九州大学大学院博士後期課程)

## ラウンドテーブル・ディスカッション

### 「日口交流の今と未来に、日本語教育は何ができるのか」

【ファシリテーター】 松井 一美 (早稲田大学)

本企画は、日本によるロシアへの日本語教育の専門家派遣を通して見えてくる現場での気付きを様々な視点で捉えるものであった。パネリストの三名は実際にロシアの大学に赴任した経験があり、それぞれの日本語教育と日本語学習の現状が報告された。特に、日口交流に対する日本語教育の果たす役割をフレームワークとして設定していた。

一つ目に、日本語教師がロシア人に教育を通じた関わり合いを持つ以前と以後の意識変容に着目した点は興味深い。紹介サンプル(例えば、「笑顔が少ないロシ

ア人」のイメージが変容する等)も豊富であったが、更に今後のデータ収集を期待したい。今回は、「日本語教師」という一つの属性の接触で捉える「特定の地域のロシア人」に注目しており、それは教育的相互関係の深まりを見る上でも重要な対象である。ただし、パネリストの今後の課題としても提起されていたように、ロシアも地域ごとに文化・宗教・生活等が多様であることが予想される。ローカリティの視点を今後の調査に含めていくことも大切であると考えます。

二つ目に、日本語教師派遣事業における、現場のロシア人同僚および学生たちとの交流により、日本語教師側の意識変容が、マクロ(国際政治的)な課題にどのように波及するかを検討していくことが求められるだろう。例えば、「赤レンガ」でお馴染みの北海道庁旧本庁舎では、北方領土問題に関する展示物も多くみられ、今後の日ロ関係の持続性について多くを考えさせられる場所である。また、「択捉島薬取村出身のばあちゃん」の引き揚げに関する物語から、「国後島に住むロシア人少年サーシャ」の物語等の展示もあり、様々なライフヒストリーを包摂する場所が北方領土である。日本語教師を通した

相互理解に対する課題は、今後の日ロの展開にいかにか波及し、また、様々な背景を持つ他者への想像力をどのくらい多くの人々へ伝えていけるかにあると感じたのは私だけではないだろう。

ロシアは国土も広いため、今後は様々な研究者が各地に入り、双方向的な情報交換が活発になることを願って止まない。そういった意味でも本報告は情報共有のキッカケとして貴重な入り口となる。そして、現場の気付きが今後の持続的な国際交流にいかにか繋がるかを私としても考えていきたい。

報告者: 奴久妻 駿介

(一橋大学大学院博士後期課程)

## ▶ 第16回年次大会特集

### 学際シンポジウム

#### 「多文化共生社会の実現に向けて-実践から導かれる理論-」

【シンポジスト】パイチャゼ・スヴェトラナ 氏(北海道大学)

【シンポジスト】佐藤 千恵子 氏(市立札幌大通高等学校)

【シンポジスト】伊井 義人 氏(藤女子大学)

【コーディネーター】千葉 美千子(元北海道大学大学院博士後期課程)

本シンポジウムでは、多文化共生社会の実現に向けた実践について、示唆に富んだ3名のパネリストの報告が行われた。「実践から導かれる理論」という副題がついており、現状・実践報告に基づき、そこからの理論形成に焦点を当てること目指されていたかと思われるが、時間の制約もあり、理論について議論することが十分できなかったことが惜まれる。ここでは、理論化に向けたアプローチの方向性も考えながら、本報告をまとめたい。

まず、スヴェトラナ氏による「サハリン帰国者—継続的・恒常的に移民の状況にある人びと」と題する発表が行われた。北海道で行われた大会にふさわしく、日本・ロシア・朝鮮という三つの世界を行き来してきたサハリン帰国者の人々の戦前・戦後を通じた複雑な家族形成、困難な歴史と、ロシア語話者となっている3世の子どもたちの多文化・多言語環境に置かれた葛藤について深く考えさせられた。彼らが移民として日本に移動して暮らす中で、自身のアイデンティティをどう捉えているか、彼らの「多重的アイデンティ」が具体的にどう形成されているのか、母語を保持する学習とアイデンティティとはどう関わっているのか、複数の文化環境の中で生きて行く成長

過程を通じて、多重的アイデンティティを、個人がどう折り合いをつけ、社会がそれをどう受け止め、どう活かして行くべきなのか、そして、それをどう理論化していくのかを考えることが重要な課題になっていると思われる。

次に佐藤氏が、「大通高校における多文化共生の取り組み」の具体的な教育実践事例を報告された。道内唯一、海外帰国生徒の特別受験枠があり、母語で受験可能な学校ということで、17名の外国籍・帰国生徒が在籍しているという。日本語だけでなく母語の学習機会も確保し、帰国生徒と日本人生徒とをつなげる部活動や、学校全体で多文化共生に取り組む組織づくりを行うなど、非常に先進的な教育プログラムが行われている。体制を整える前は、日本になじめず退学者が多数いたのが、現在では退学者がゼロになるという効果をあげている。これらの実践活動を通して日本人生徒にも国際的視野をもたらしているということであったが、これらのプログラムの効果について、各個人、及び学校社会の変容の面からどのように評価するのか、実証的研究に基づいた理論化が今後、必要かと考える。

最後に伊井氏から「多文化教育を通して子どもたちはどのような『力』を習得するのか—オーストラリアの実践から学べること」という発表がなされた。数十年にわたって取り組まれている多文化教育が、オーストラリアの社会に何をもたらしているのか、その検証と分析からさまざまな示唆を得ることができると思われる。多文化教育を通じて子どもたちが習得すべき力として、「知識」ではなく「スキル・視点・態度」が重視されているということであったが、日本での教育に生かすには、それらがどのような質のものであるのか、どうやって学習され、その学びをどう評価できるか、という

明確なフレームワークも必要であろう。また、近年、多様性を重視することが、個人に還元され、各自の個性を重視するという方向に動いているようであるが、それは「多文化」という意識を拡散させてしまうことになっているのではないか。多文化共生を目指す社会にとって、「文化の多様性」と「個人の多様性」の相克をどう捉えるべきかという根本的な理論枠組みについて考えることも課題であろう。

今回の貴重な報告を基に、今後、さらなる理論的探求が進められて行くことを期待している。

報告者：松田 陽子（兵庫県立大学）

## ▶ 第16回年次大会特集

# 石井奨励賞審査結果

第16回多文化関係学会石井米雄奨励賞審査委員長 湊 邦生

石井奨励賞は、若手研究者による優れた研究発表を促進し、表彰する目的で、大学院生および任期付・非常勤職の研究者による年次大会での優れた発表を表彰する制度です。第16回多文化関係学会では4名（いずれも口頭発表）の発表者からご応募いただきました。

審査委員会では抄録による第1次審査および当日の発表による第2次審査を行いました。その結果、以下の1名を受賞者といたします。

### 「日本の公立学校におけるフィリピン語の母語・継承語教育の意義と課題

#### —公立高等学校でフィリピン語を学ぶ生徒たちの事例から—

矢元 貴美(上智大学)

授賞理由・講評：多文化関係学にとって重要なテーマについて、長期にわたる参与観察によって蓄積した豊富なデータをもとに研究が展開されており、調査手続き上の配慮も十分なされている。今後はフィリピンにおける言語の多様性・多層性への対応についての検討、授業での活動に対する生徒の不満に関する考察が深められれば、さらに研究が発展するであろう。

# 第17回年次大会は名古屋！

## 「名古屋においでん！待っとるで〜」

第17回大会準備委員会委員長 笠原 正秀（相山女学園大学）

■期日：2018年9月22日（土）・23日（日）

※プレカンファレンス：9月21日（金）

■会場：相山女学園大学（星ヶ丘キャンパス）国際コミュニケーション学部棟  
相山女学園大学へのアクセス（<http://www.sugiyama-u.ac.jp/univ/access/>）

- ・JR名古屋駅から地下鉄東山線星ヶ丘駅下車、徒歩5分、（約30分）
- ・中部国際空港（セントレア）から名古屋駅経由、地下鉄東山線星ヶ丘駅下車、徒歩5分（約1時間15分）
- ・県営名古屋空港から高速連絡バス（名古屋駅行）で栄下車、地下鉄東山線栄駅から星ヶ丘駅下車、徒歩5分（約1時間）

※当日は、星ヶ丘駅から大学まで、プレートを持った案内役の学生を何か所かに配置する予定ですが、上記ウェブサイトからも国際コミュニケーション学部棟のキャンパス内での位置が確認できますので、事前にご確認いただけますと幸いです。

■内容（進捗状況の報告）：

上記のとおり、第17回年次大会を名古屋にて開催いたします。9月21日（金）に行われるプレカンファレンスでは、文化と文化の「はざま」で暮らす子供たちをテーマに、名古屋にある外国人学校を訪問し、日本で暮らす外国人の子供たちの姿と彼らを支える学校の様子を見学していただくと考えています。また、見学だけで終わりにせず、そこから派生した形で、子供たちの声を聞いたり、現場の先生方の声を聞いたりするチャンスを設けられたら…と、現在、検討・交渉中です。

9月22日（土）と23日（日）は、相山女学園大学を会場に本大会となります。基調講演では、「地域の国際化と多文化共生」をコンセプトに、「教育」「労働」「行政サービス」など、今回の年次大会のテーマ全体を幅広く網羅するお話をしていただくと考えています。またパネル・ディスカッションでは、「外国人労働者の現状と課題」と題し、「外国人労働者」「企業人事担当者」「研究者」の各視点からのご発言をもとにディスカッションを進められたらと計画中です。そして、シンポジウムでは、「多文化共生社会の形成」をキーワードに、「生活者としての外国人」の視点から「教育」「医療」「福祉」「防災」などの話題を提供したいと考えています。

大会ポスターについては、現在、ほぼ完成しております。このニューズレターが会員のみなさまのお手元に届く頃には、学会ウェブサイトを通じて、ご紹介できるのではないかと思います。同時に、大会全体をつかさどるテーマもその時にご紹介する予定です。また、大会ウェブサイトは3月末から4月上旬には公開できるようにしたいと考えております。

最後に、本学の最寄り駅である、地下鉄東山線星ヶ丘駅を降りるとすぐ目の前に、「星ヶ丘テラス」（<http://www.hoshigaoka-terrace.com/index.php?ts=1515254895>）というショッピング街が広がります。ちょっとオシャレな雰囲気のお店で、お食事やお茶を楽しまれてはいかがでしょうか。この星ヶ丘テラスでは、ハロウィン・クリスマス・お正月等の時季になりますと、本学の生活科学部生活環境デザイン学科の学生たちとのコラボレーション企画で、たいへん美しいイルミネーションが街を彩ります。「星ヶ丘テラス」「イルミネーション」で検索していただくと、その様子をご覧いただけるのではないかと思います。

ということで、ぜひ9月21日（金）～23日（日）の3日間、名古屋にお越しいただけることを期待しております。**名古屋においでん！待っとるで〜。**

# 地区研究会報告

## ■ 関東地区研究会報告

日時: 2017年7月23日(日) 13:00~16:00

場所: 明海大学(浦安キャンパス) 2501教室

第1講演者: 原 和也(明海大学)

「石井敏先生を偲ぶ会」

関東地方は梅雨明け宣言をしたものの、7月23日(日)は東京湾から程良く涼しい風を運んでくれました。

その日は、2017年1月に逝去された石井敏先生を偲ぶ会が、門下生である原和也さん、小山慎治さん、海谷千波さんを中心に行われました。



会場には、生前、石井先生が学部や大学院の授業のために準備された資料が展示され、熱心に学生を指導されたお姿が想像できました。それと同時にその資料を大切に保存されていた原さんとの絆の深さを伺い知ることができました。

一分間の黙祷を捧げたのち、石黒武人先生(順天堂大学)よりお預かりした石井先生のご研究に関する紹介の言葉で始まった会は、和やかな雰囲気が漂っていました。

はじめに原さんから、石井先生との思い出のエピソードの紹介がありました。その中で常に日本文化に根ざした研究を世界に発信することが石井先生の指導の中心にあったとのことでした。アメリカの異文化コミュニケーションの輸入や模倣をしないように、そしてアメリカ人研究者にはできない研究をするように、との先生のアドバイスは私たち日本人にオリジナリティを追求することを求める貴重な教えであることが伝わってきました。

次に外国人に日本語を指導されている小山さんが、「遠慮・察し」という日本式のコミュニケーションの研究で著名な石井先生に師事されたきっかけをはじめ、思い出を語られました。想像以上に英語の文献を読まれたこと、また理論と実践との乖離など、悩みながら過ごされた大学院生時代を振り返られました。石井先生からは抽象的なアドバイスが多かった一方で、「教師そして異文化コミュニケーションの実践者としてのあり方を教わった」と語った小山さんにも石井先生の教えが根付いているのが理解することができました。

最後に海谷さんが、石井先生との数々のエピソードを紹介されました。初めてお二人で旅をしたのは2001年のブリティッシュヒルズで、その時、多文化関係学会が産声を上げつつあったことを思い出すと、「新しいパラダイムを求める」という研究の初心に戻る機会を先生から最後にいただいたと思うとのことでした。

その他にも、石井先生との多くの国内旅行に同行された海谷さんの話を聞きながら、さぞかし珍道中だったのでは、と想像が膨らみました。大学院生の視点と自主性を尊重する石井先生の下で指導を受けられたことで、門下生三名の現在の活躍があると言っても過言ではありません。

また、石井先生の奥様からお心遣いをいただき、ご自宅で経営される和菓子店から頂戴した茶饅頭が休憩時間中に参加者全員に振舞われるというサプライズがありました。大変濃厚な餡子が入った美味しい茶饅頭に舌鼓を打ちながら、参加者皆で思い出話に花が咲きました。

門下生のお話、そして参加者が語る生前の先生との思い出を聞きながら感じたのは、求めていたもの以上に多くを与えることができるのが石井先生の魅力でないか、ということでした。その先生の魅力が、ネクタイ姿の遺影にみられた微笑みと重なったと感じたのは私一人ではなかったはずです。

石井敏先生のご冥福を心よりお祈りいたします。

報告者: 武田 礼子 (成城大学)

**第2講演者:**田崎 國彦 氏(パーリ・サンスクリット・チベット「平和の文化」研究所代表)

**テーマ:**「アウンサンスーチーのノーベル平和賞受賞講演における〈上座仏教の社会化〉と〈平和の構築〉」

アウンサンスーチー(以下スーチー)は1991年10月14日にノーベル平和賞を受賞しましたが、当時は故国ビルマ(ミャンマー)で自宅軟禁状態であったため授賞式への出席が適わず、受賞講演は受賞21年後の2012年6月16日に行われました。今回の田崎先生のレクチャーでは、スーチーのノーベル平和賞受賞講演の隠れた構造が上座(パーリ)仏教の四諦(したい)説にあるとし、彼女が上座仏教の社会化(民主化運動への活用)を通じて平和の構築(国民和解など)を目指しているという解釈が提示されました。言い換えると、英語によって表現された受賞講演を、上座仏教の概念を用いて解釈することを通じて、ノーベル賞受賞の意味とスーチーが提案する平和の意味を理解しようとする講演です。

現在、スーチーはロヒンギャ救済に積極的ではないという理由で批判されがちです。この批判について田崎先生は以下の2点を指摘されました。ひとつは、彼女は民主化運動の指導者、政治家であって人道活動家ではないのにもかかわらず、これらが混同されることが多い点です。もうひとつは、軍政というコンテキストがスーチーの行動に制約を加えている点です。ミャンマーの民主化は半世紀余り続いた軍政の悪しき遺産を引き受けたくえで進めざるをえない上に、ビルマ国軍側がミャンマー民主化の失敗を待っているという状況下で民主化を進める困難が考慮されるべきであるという点です。

現在はこのような困難な状況下で民主化のリーダーとなり政権を握っているスーチーですが、彼女の経歴を見ると、多文化の中で生活し、その生活の中で培った民主主義をはじめとする異文化体験や自文化理解、及び仏教の理解と実践が彼女の国内外に向けたメッセージの軸を形成しています。ビルマ建国の父と呼ばれるアウンサン将軍の娘として生まれたスーチーは、15歳のときに母の赴任にともないインドへ出国して以来、イギリス、アメリカ、日本等の外国で暮らし結婚しましたが、帰国後に軍事政権によって自宅軟禁されます。彼女はこの自宅軟禁中にそれまでも身近であった上座仏教を再度研究し瞑想実修しました。

スーチーのノーベル平和賞受賞講演は英語で行われ、そのテーマは平和です。そこで述べられている平和はラテン語起源の英語のpeaceとは異なり、上座仏教の四諦概念に基づくものです。四諦は、苦(暴力という苦の原因)、滅(集を取り除いた平和の状態)、道(滅に至る非暴力的な過程)の4つの要素で成り立っています。



peaceの語源とされるラテン語のpaxは征服・支配による平定(平和)を意味します。一方、スーチーは平和をbeneficial coolness(煩惱の火の停止による心の鎮まった冷静で効力のある状態)としています。スーチーは、様々な形の暴力(直接的・構造的・文化的暴力)が支配し人々が苦しんでいる社会(苦・集)を、慈悲を行動指針とした人々による共同の努力や連帯などの非暴力的方法(道)によって、平和的人間社会へ転換すること(滅)が平和構築であるとしています。これは仏教の社会化による民主化の提案であると解釈することができるかと田崎先生は主張されました。



ノーベル平和賞受賞講演を英語で行うにあたり、ビルマの伝統文化(上座仏教)を自文化とし、複数文化での生活経験をもつスーチーが、講演を異文化コミュニケーションとして位置づけ、言葉を選び説明を尽くす努力をしたことは想像に難くありません。しかしながら、英語を媒体としているために、聴き手が英語を母語とする人々の解釈に準じて講演を解釈する可能性が高くなることは否めません。今回の説明をお聞きして、スーチーが講演で意図している意味—例えば慈悲という点から理解すべきkindness—を理解するには、上座仏教の枠組みを理解することが必要であることを実感しました。よく言われていることですが、他者の発言を解釈するにあたっては、発言者の現実認識の枠組みを理解する、あるいは想像することが重要であることを再認識する機会となる講演でした。

第1部の静かな述懐とはまた趣が異なりますが、第2部の田崎先生の厚い配布資料を用い張りのある声で行われた講演もまた、石井先生の学問に対する真摯で情熱あふれる態度を共有する場となりました。

報告者: 赤崎美砂 (淑徳大学)

## ■ 中国・四国地区研究会報告

日時: 2017年11月25日(土) 14:00~16:00

場所: 岡山理科大学A1号館10階会議室

テーマ: 「メキシコの初等教育における格差」

話題提供者: 江藤 由香里 (山陽学園短期大学)

2017年度の中国・四国地区研究会は、秋晴れの中、学園祭開催中の岡山理科大学にて実施されました。8名の参加者を得てアットホームな雰囲気の中で行われました。講師の江藤先生は、アメリカとメキシコに滞在経験があり、自ら3か国語を流暢に話されるトリリンガル。メキシコの教育制度や実態に精通され、メキシコの学校制度の話や教育上の問題点などについて日本との比較の視点を持ちながら分かりやすい情報提供と問題提起をしていただきました。メキシコでは、公立小学校と私立小学校の教育内容に大きな格差があり、良質な教育を受けるためには私立小学校を選択せざるをえない状況があることなどがデータとともに紹介され、公教育実施の難しさについて考えさせられました。また、このような事象は必ずしもメキシコ固有のものではなく、日本においては経済力のある家庭の子どもは学習塾に行くことにより学力を向上させることができるという事象と置き換えて考えてみるができるという指摘がなされ、参加者は深く聞き入っていました。

経済格差と学力格差の関係が指摘される一方で、経済的に厳しい状況においても学力向上が見られたメキシコの学校の例についても紹介され、どのような社会文化的状況が子どもの学力にプラスの影響をあたえるのかについて、興味深い示唆を得ることができました。日本でも、どのような環境の創出が類似の現象を生み出すことができるのかについてヒントが得られたように思います。参加者は、江藤先生からお話を聞き、質問や意見を交わし合うことを通して、1つの国における社会文化的な現象を自国のそれへとつなげて考えていく発想を身につけることができましたようです。社会経済の階層化が教育にどのように影響を与えるのかについてグローバルな視点から考えるよいきっかけをいただくことができた素晴らしい講演会でした。

報告者：奥西 有理（岡山理科大学）

## ■九州地区研究会報告

日時：2017年6月22日（木） 16:30～18:00

場所：九州大学伊都キャンパス比文言文教育研究棟4階第8セミナー室

テーマ：「復言語・複文化環境における言語学習、言語教育」

話題提供者：ユディット・ヒダシ（ブタペスト商科大学）

多文化関係学会の設立メンバーであり、ヨーロッパ支部長を務めておられるユディット・ヒダシ氏をお招きし、グローバル社会における言語使用の課題を踏まえて、言語教育と文化の関係を中心に、文化が言語学習に与える影響について紹介していただいた。

グローバル化が急速に進展する今日の社会において、スコアで示されるような外国語知識としての言語能力向上を目指す教育から脱却することが重要であると指摘した。外国語知識はツールであり、重視されるべき能力は目的にあったコミュニケーションが取れるかどうか、深みのあるインターアクションができるか否かという点であると説明した。多数の国・地域間の相互依存関係が深化する中、多様性の高いグループで目標を共有し、目的を達成しなければならない場面がますます増えてくる。そのような場合に、自らの文化規範とは異なる行動様式について理解する姿勢や、共に活動するメンバーの文化的背景がコミュニケーションにどのように影響しているのかについて理解し、配慮することが求められると指摘した。

その上で、報告者は、言語習得や言語教育における日本と欧米との違いを示しながら、言語や文法中心の外国語教育ではなく、コンテンツベースの外国語学習やデジタル技術の活用について提案した。異文化に関するコンテンツを英語学習の「材料」として捉えるのではなく、異文化に関する知識の獲得を目的の一つとして据え、外国語学習を行うことにより、人間関係に不可欠な言語行動の習得についても同時に可能となると議論した。



大阪・名古屋・岩手など遠方の方々や、非会員の参加もあり、出席者は17名となった。大学院生の参加も多く、講師への積極的な問いかけから活発なディスカッションが展開され、大変有意義な研究会となった。

報告者：山田 直子（佐賀大学）

# 2017年度多文化関係学会 理事会議事録 抄録

## ■第2回理事会 議事録

日時:2017年7月23日(日) 11:00~12:45

場所:明海大学浦安キャンパス(於千葉県浦安市)2531 教室(講義棟5階)

出席:9名(敬称略、以下同松永、中川、湊、田中、原、伊藤、宇治谷、武田、松井(順不同))

委任状:6名 奥西、金本、趙、出口、内藤、山田(順不同)

### [報告事項]

#### (1)各委員会報告

##### ①学会誌編集委員会

現在査読者からの返事待ち。査読結果を7月末に締め切り、8月10日に編集会議を開催し、判定を行ってから執筆者への連絡を行う。応募件数は13件。

##### ②北海道・東北地区研究会

年次大会の準備中のため、地区研究会については現段階で未定。

##### ③関東地区研究会

本日、今年度第1回研究会を「石井先生を偲ぶ企画」及び田崎先生ご講演として開催。

##### ④関西・中部地区研究会

委員を1名追加する。

##### ⑤事務局

現在の会員数は、総会員数380名、うち正会員274名(11名不明)、学生会員100名(22名不明)、シニア会員5名、賛助会員1名(不明)。

##### ⑥学術委員会より

特定課題研究は7月20日に募集締め切り、応募1件。石井奨励賞は応募4件。

#### (2)年次大会準備進捗状況報告

##### ①プログラム内容について

- ・簡易プログラムを7月17日に発送した。経費節約のため準備委員会で印刷、送付作業を行ったが、長時間を要するので次回大会からは、従来通り業者委託の方向で考えた方がよい。
- ・研究発表は17件。ほかにラウンドテーブル・ディスカッション1件、英語プレゼンテーションワークショップ4件(実施内容が明らかになるよう名称変更)。
- ・パネルディスカッション、学際シンポジウム、基調講演を行う。基調講演は公開予定。
- ・総会ならびに2016年度石井奨励賞受賞者挨拶は2日目の昼休憩時間にランチ総会として開催。
- ・次回の理事会は、年次大会2日目の午前8時~9時に行う。

##### ②進行中の作業について

- ・抄録集は7月中に仕上がる見通し。広告掲載企業は5社で、請求書と抄録集を送付予定。
- ・事前申込み、事前支払いの集計は8月4日以降に行う。
- ・懇親会は、現在業者とやり取り中である。経費節減のため、手作り案等を検討中。
- ・アルバイトは10人程度確保できる見込み。
- ・プレカンファレンスについては、今後、開催場所の北海道博物館と詳細を詰めていく。

・紀要の販売については、大会準備委員会がインターブックスから全バックナンバーを3部ずつ取り寄せる。1冊1800円。売り切れた場合、購入者が直接インターブックスに連絡し、購入する。

### ③来年度の年次大会に向けての課題

・抄録原稿スタイルチェックについて、担当者の負担が過大であること、過去大会ごとに対応が異なるケースがあったこと、日本心理学会準拠の形式に慣れない研究者もいること、執筆者により質的調査データの表記が異なることが判明した。次年度以降は学会誌に準拠することを明記しつつも、詳細についてはweb でテンプレートを示すこととした。

・新規会員登録の受理と当該者の年次大会発表応募登録の受理の時期を調整する事態が生じ、締め切り延長にともなう登録の遅れとして処理した。今後は発表応募の時点で会員登録を済ませることを原則として、締め切りが延長になった場合は少なくとも仮登録を済ませておくこととした。

・研究発表の採択に際し、準備委員会で紛糾したケースがあった。これについては学術委員会に相談した結果、かなり多くの条件をつけての採択とした。

### [審議事項]

#### (1)年次大会における補助金および残金の取り扱いについて

・現在、大会通帳に215,667円の残高があり、これについては大会用として別枠で維持すること、次回から5月の臨時総会で大会費用の会計報告も行うことが承認された。

・財務委員長より過去3年間の大会補助金について報告。2016年度は収入・支出ゼロ、2015年度は30万円を支出して同額を戻し、2014年度は50万円を支出、残金65,429円が戻されている。

#### (2)記念出版について

・20周年の記念出版としては決定したが、方向性については未定。これに関し、10周年記念出版をふまえ、それ以降の10年に焦点をあてたものにするか、実践研究的なものにするか、ワーキンググループを立ち上げて、テーマを議論することが承認された。

・一案として学術委員会メンバーと過去の会長経験者でワーキンググループを構成し、企画アイデアを出し合い、理事会で報告するというものが出された。

#### (3)広域地区研究会について

・これまでの地区研究会はそのまま、地区を越えて若手が発表できる場をつくるという考えからの発案。方針については理事会で決め、具体案は学術委員会で議論する。

・地区同士が連携し研究会を開催、地区の事情に応じて若手の発表の場を設ける、講演会の実施、また、広域で実施した場合は地区の研究会は実施しないなど、柔軟に実施する。

#### (4)その他

・研究者ではないが、学会に関連するような社会問題に関心があり、活動している方の発表の場があればとの提案があった。これに対し、ポスターセッションやラウンドテーブル形式による事例報告セッションを作る案等が出され、次年度大会への引き継ぎで伝えることとした。

・学会誌編集委員会より、執筆者からジャーナルに正誤表を入れたいという要望があるが、過去にそのような事例があるかの確認があった。これについて、正誤表までは許可するが、web上のもの(CiNii、J-stage等)は自己責任で行うことを決定した。

以上

### ■第3回理事会 議事録

日時:2017年9月10日(日) 8:00~9:30

場所:藤女子大学(於北海道札幌市)558教室

出席:11名(敬称略、以下同)松永、中川、湊、田中、原、伊藤、宇治谷、松井、金本、趙、内藤(順不同)

委任状:4名 奥西、山田、武田、出口(順不同)

#### [報告事項]

##### (1)事務局報告(事務局長)

現在の会員数の報告を行った。

総会員数312名うち正会員246名(内16年度末退会希望5名 不明2名)、  
学生会員61名(内退会希望1名 不明4名)シニア会員5名

##### (2)各委員会報告(各委員会委員長)

###### \*学術委員会

査読結果は、修正後採択1本、再査読5本、不採択7本という結果であった。

第3回編集委員会を10月21日に開催し最終判定を行う。

###### \*ニューズレター委員会

NL第32号の案が示され、一部訂正された。

###### \*学術委員会

###### ・特定課題研究

応募者が1名あったが、条件を満たしておらず、再応募を促したが、返信がなかったため、本年度は採択なしとする。

###### ・石井奨励賞

4名の応募者の内、2次選考対象者として、2名を選出した。対象者の10日の発表修了後、委員会で協議し、決定する。

審査基準に関して、審議の結果、大項目を各20点とし、5項目で100点満点で採点することとした。

###### ・広域研究会

若手の交流の場として適切かどうかを含め、さらに検討を進めていく。

###### \*各地区研究委員会

###### ・北海道・東北委員会

再来年度をめどに、交互に開催を企画中。

###### ・関東地区

2017年7月23日(日)に明海大学で「石井敏先生をしのぶ会」が開催された。

###### ・関西・中部地区

吉富志津代先生(名古屋外国語大学)が新委員となった。

###### ・中国・四国地区

特になし

###### ・九州地区

6月22日に九州大学において、ブタペスト商科大学 ユディット ヒダシ先生をお招きし、講演会を行った。

(3) 年次大会報告(大会委員長)

参加者は、約70人、一般の方が、3名、懇親会は、約50名の参加があった。  
新聞広告に誤りがあり、大会委員で対応することとした。

(4) 記念図書出版について(学術委員会委員長)

ワーキングメンバーとして、田崎勝也先生に依頼し、承諾を得た。ワーキングメンバーの選定をしていき、委員会の立ち上げにつなげていく。

(5) その他

特になし

[審議事項]

(1) 特定課題研究の募集

2018年度は、11月に応募開始、12月に締め切り、審議後、年明けに応募者に通知する日程で 調整中。  
異論なく、了承された。

(2) 学会誌執筆要項および投稿規定の改定

・匿名性に関する第3条

および執筆者が関わるプロジェクトやプログラムなどを追加

・投稿手続きに関する第9条

ハードコピー3部を1部に変更

・字数制限

質的研究領域では、20000字の制限は難しいため、緩和したいが、具体的な文字数については 委員会で審議し、理事会に報告する

・予算

11月から12月頃に仮見積もりを執行部に提出し、必要があれば、理事会で審議する。

上記に3点について、審議の結果、承認された。

(3) 学会誌編集委員会関連

3号がインターブックスには在庫はないが、過去の事務局が保管している可能性があり。在庫を持っている場合は、事務局長に連絡し、在庫数を把握する。その後、インターブックスに管理を依頼するかを検討する。

過去の学会誌の価格の変更については、執行部で検討する。

(4) その他

特になし

以上

# お知らせ

## 地区研究会のご案内

### ■ 関東地区研究会

日時: 2018年2月17日(土) 13:00~16:00(12:30より受付開始)

場所: 成城大学 (<http://www.seijo.ac.jp/access/>)

7号館 711教室 (<http://www.seijo.ac.jp/about/map/>)

※ 最寄り駅の成城学園前駅には小田急線新宿駅より「急行」をご利用下さい。「快速急行」は成城学園前駅には停車いたしません

参加費: 無料 茶話会: 500円

テーマ: 「対話論とは何か—対話的な社会問題の読み解きと対話の意味」

講師: 小坂 貴志 先生 (神田外語大学)

今回の関東地区研究会は、講師に神田外語大学の小坂貴志先生をお迎えします。小坂先生のご専門である対話を通して、メディアでも取り上げられている北朝鮮問題にも及ぶ内容も含め、改めて対話の意味を問えれば、と考えております。

### 【問い合わせ先】

kantomulticultural@gmail.com

申し込みは次のサイトよりお願いします。 <https://survey.zohopublic.com/zs/1xBUIW>

### 【内容】

これほどまでに対話が日常社会に蔓延しているにもかかわらず、まるで当たり前であるかのように私たちは「対話」の言葉を目にし、耳にしている。本発表では、対話の意味論、語用論をテーマに、対話の意味を真剣に考察していく。

考察のための先駆けとして、発表者がどのような経緯で対話論に行き当たったか、発表者の立ち位置を明らかにするための紹介で幕を開け、対話論に援用している理論家バフチン、ヴィゴツキー、オングなどの考え方を説明しつつ話を展開させていく。

応用篇として、政治家による対話の言葉の使用をとりあげ、中でも、毎年夏の恒例となりつつあり、2017年も同様に、北朝鮮による威嚇が世界問題へと発展し、特に米トランプ政権の誕生により、この問題は長期化・深刻化していった北朝鮮問題を巡る過程において、いかに対話がその役割を果たし、世界紛争を乗り越えるに至ったかを分析し、対話論の今後を占っていく。

### 【講師経歴】

小坂 貴志 (KOSAKA, Takashi)

青山学院大学文学部英米文学科卒業後、日本アイ・ビー・エム株式会社にてSEとして勤務。退職し渡米、デンバー大学大学院、修士号取得。同博士課程単位取得終了満期退学。Prudential Intercultural Resource Servicesにてビジネスコンサルタント(非常勤)、J.D. Edwards Companyにてテクニカル翻訳者、モントレー国際大学翻訳通訳研究科専任講師、立教大学経営学部国際経営学科特任准教授などを経て、現在、神田外語大学外国語学部英米語学科教授。研究領域は異文化コミュニケーション研究、対話論。多文化関係学会では、元紀要編集長、元副会長、SIETAR Japanでは学術委員を務めた。主要著書に『改訂版 異文化コミュニケーションのA to Z』、『異文化対話論入門』(以上、研究社)、『現代対話学入門』(明石書店)がある。

## ■ 関西・中部地区研究会

日時:2018年3月17日(土) 15:00~17:00

場所:名古屋外国語大学7号館3階(738教室)

〒470-0197愛知県日進市岩崎町竹ノ山57 代表電話:0561-74-1111

\*キャンパスマップとアクセス情報のURLを以下にお知らせします。

アクセス情報:<http://www.nufs.ac.jp/static/map/access.html>

キャンパスマップ:[http://www.nufs.ac.jp/static/map/campus\\_map.html](http://www.nufs.ac.jp/static/map/campus_map.html)

参加費: 300円(茶菓代)

テーマ:「法廷通訳人から見た通訳言語としての英語をめぐる課題に関する一考察」

話題提供者:ヤコブ・E・マルシャレンコ (Jakub E. Marszalenko) (名古屋外国語大学)

### 【問い合わせ先】

宇治谷映子(中部・関西地区研究会委員長、名古屋外国語大学英米語学科)

メール:[ujitani@nufs.ac.jp](mailto:ujitani@nufs.ac.jp)電話:0561(74)1111 (大学代表)

### 【発表者略歴】

ワルシャワ大学大学院日本学研究科及び大阪大学大学院人間科学研究科で博士前期課程修了

名古屋外国語大学大学院国際コミュニケーション研究科博士後期課程修了

現在、名古屋外国語大学国際交流部の職員、英語及びポーランド語の司法通訳翻訳人、フリーランス通訳翻訳者

## Web 管理・広報委員会より

《登録事項の更新をお願いします》

### ■ 会員専用サイトでの所属・住所等の変更

ご所属・e-mailアドレスなど会員登録情報の更新をおねがいたします。会員登録情報の変更は会員各自で行えます。登録情報を更新しなければ学会からのお知らせが届きません。登録情報に変更があった場合は更新をよろしくお願い致します。また、e-mailアドレスについては、現在使用されていないアドレスの方がいらっしゃいますので、今一度ご確認ください。なお、IDやパスワードがお分かりにならない方は 出口 (tdeguchi@jus.kindai.ac.jp) 宛に御連絡下さい。

### ■ 登録情報の更新手順

1. 多文化関係学会ホームページ(URL: <http://www.js-mr.org/>)
2. 学会員専用サイト(会員番号・パスワードを入力し、ログインボタンをクリック)
3. 登録情報更新をクリック
4. 変更点を修正し、一番下の更新をクリック

(Web管理・広報委員会委員長 出口朋美)

### ■学会誌編集委員会から「多文化関係学第14巻」発刊に関するご報告

学会誌第14号が完成いたしました。1月中には会員の皆様のもとにお届けできると思います。今号におきましては秀逸な論文5本を掲載できましたこと、査読委員の先生方ならびに学会誌編集委員会のメンバー全員と共に喜んでおります。

いずれもフィールドワークやインタビューを通しての質的研究によるもので、異文化がせめぎあう現場を丁寧に分析あるいは描写しようとしているものです。充実した学会誌となりましたので、ぜひとも一読いただきたいと思っております。

次号(学会誌第15号)は、例年通り投稿論文・研究ノートの受付を行います。**次号への締め切りは4月30日(必着)**となっておりますので、奮ってご投稿をお願いいたします。なお、ご執筆・ご投稿を検討いただいております会員の皆様におかれましては、査読および校正の作業を円滑に進めるためにも、執筆・投稿前にぜひとも巻末にあります「投稿規定」ならびに「執筆要領」のみならず、本学会誌は「執筆要領第5条」にありますとおり米国心理学会の規定に準拠しておりますので、これらをご参考にしていただけますようお願い申し上げます。

加えまして、執筆要綱および投稿規定を一部改訂いたしました。今年度に改訂いたしました点を簡単に以下にご報告いたします。

1. 質的研究による論文の投稿を促進するために制限字数を緩和(投稿規定第7条)
2. 編集委員間の文書管理のクラウド化によってハードコピーの郵送部数を削減(投稿規定第9条)
3. 論文審査基準の公正さを保つために「注」を付記(投稿規定第12条)
4. 投稿・連絡先の変更(投稿規定第20条)

最後になりますが、今後とも会員の皆様のご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

### 2017年度学会誌編集委員会

委員長	金本 伊津子 (桃山学院大学)
副委員長	原 和也 (明海大学)
委員	岡村 郁子 (首都大学東京)
委員	クリス オリバー (上智大学短期大学部)
委員	趙 師哲 (愛知淑徳大学)
委員	仲野 友子 (青山学院大学)
委員	奴久妻 駿介 (一橋大学大学院)
委員	叶 尤奇 (椋山女学園大学)

(学会誌編集委員会委員長 金本 伊津子)

## 学術委員会より

### ■2018年度特定課題研究募集結果について

多文化関係学会では、会員間での研究連携の活発化を促し、共同研究をスタートアップさせるために、「特定課題研究」を設けています。2018年度の研究課題については、2017年11月1日から12月10日の期間に募集を行いました。ただし、この間に応募がなかったことから、今回の募集で課題の採択は行いませんでした。

なお、特定課題研究につきましては2016年度から募集を行っていますが、この間応募自体が非常に少ない状況が続いていることから、募集期間の延長や再募集は行わず、今後学術委員会において、学会員の皆様の需要に合致した研究支援制度のあり方について検討することといたします。

(学術委員会委員長 湊 邦生)

## 事務局より

2017年4月より新理事会がスタートし、事務局も新しいメンバーで活動を開始し、あっという間に10ヶ月が経ちました。まだまだ戸惑うことも多く、会員の皆様には迷惑をおかけしていることもあると思います。事務局一同、皆様のお力をお借りしながら、今年も事務局運営を行ってまいりますので、どうぞよろしくお願いたします。以下、事務局からのお知らせです。

### ■事務局所在地について

〒120-0023 東京都足立区千住曙町34-12  
東京未来大学 モチベーション行動科学部  
田中真奈美研究室内 多文化関係学会事務局  
\*Eメールアドレス admin@js-mr.org

### ■学会費の納入について

今年度も学会費納入をお願い致します。その際、払込料金(手数料)の支払いにつきましては、会員の皆様の方でご負担お願いいたします。

### ■会費納入状況に関するお問い合わせについて

お問い合わせは、会費に関する業務を委託しております学協会サポートセンター(scsc@gakkyokai.jp)までお願い致します。その際、メールの件名は「多文化関係学会」とし、ご自分の氏名、会員番号、ご用件をお書きください。また、住所・所属などに変更がございましたら、大変お手数ですが、学会員専用サイトにログインし、ご自分で情報を更新していただくとともに、送付物の住所を管理している学協会サポートセンターにもご連絡ください。

### ■学会ホームページ「学会員専用サイト」の会員番号とパスワードについて

学会ホームページ(HP)<http://www.js-mr.org/>では、登録情報の更新などを行える「学会員専用サイト」があります。情報の確認及び更新をお願い申し上げます。学会員専用サイトへのログインには、会員番号とパスワードが必要です。お忘れになった方は、事務局(admin@js-mr.org)までお問い合わせください。

## ■学会誌『多文化関係学』バックナンバーの販売について

学会誌の販売は、株式会社インターブックスに委託いたしております。学会誌バックナンバーのご購入をお考えの会員の方々は、恐れ入りますが、学会事務局ではなくインターブックスにお問い合わせください。

ホームページ: <http://www.interbooks.co.jp/>

メールアドレス: [info\\_ml@interbooks.co.jp](mailto:info_ml@interbooks.co.jp)

電話番号: 03(5212)4652 ファクス番号: 03(5212)4655

なお、学会誌『多文化関係学』の論文は、論文検索サイトJ-STAGEにおいて順次掲載されております。

(事務局長 田中 真奈美)

## 新入会員紹介 (敬称略、入会順)

会員資格	氏名	所属	研究分野 / 業務内容
一般	福田 鈴子		異文化コミュニケーション
一般	鈴木 崇夫	名古屋大学国際言語センター	継承語教育、バイリンガル教育、地域日本語教育
一般	李 鳳	北海商科大学	cross-cultural pragmatics/韓国語教育、異文化ゼミ
学生会員	陳 帥	九州大学 修士課程 地球社会統合科学専攻	地域日本語教育
一般	村上 治美	東海大学国際教育センター留学生支援教育部門	日本語教育・日本文化教育
学生会員	ツァゲールニック タッチャナ	北海道大学 教育学院博士課程 多元文化教育論専攻	文化人類学、先住民族学、アイデンティティ研究
一般	矢元 貴美	上智大学アジア文化研究所	外国人児童生徒の教育、外国語教育
学生会員	童 哲慧	青山学院大学 修士課程 国際政治経済学研究科国際コミュニケーション	比較文化 ナショナル・アイデンティティ
学生会員	安 芝恩		日本語教育
学生会員	飯島 力	九州大学大学院 修士課程 文化人類学	ラティノー壁画
一般	原 紘子	熊本県立大学	異文化コミュニケーション
一般	鄭 根珠	北星学園大学	現代日韓関係史、日韓歴史文化論
学生会員	津島 あずみ	琉球大学 人文社会科学研究科 国際言語文化専攻	家庭内コミュニケーション
一般	中島 幸雄	大同生命保険株式会社	異文化間ビジネス
学生会員	趙 孝川	大阪大学 博士課程 比較公共政策専攻	異文化間コミュニケーション
一般	コマシン ステファ ニー ミドリ	北海道教育大学教育学部(旭川校)英語教育専攻	札幌バンドの思想・女性観・国際交流、アジア太平洋の地域の現代のクエーカーの生活様式、異文化理解教育、異文化コミュニケーション論、国際理解論

(2017年4月1日から2017年10月31日に入会された方)

## 会員新著紹介

### ■『早わかり混合研究法』 A Concise Introduction to Mixed Methods Research

著者:ジョン・W・クレスウェル

訳者:抱井 尚子

出版社:ナカニシヤ出版

出版年:2017年8月30日

総ページ数:149頁

内容: 混合研究法を始めようとする読者の入り口として、定義や手順、基本的スキルなど、重要なポイントが2〜3時間で読める最適な入門書の翻訳本。混合研究法コミュニティを牽引するジョン・W・クレスウェル(John W. Creswell)が、ハーバード大学で行った講義に基づき、混合研究法のA to Zをコンパクトにまとめた1冊です。

## NL 委員会より

### ■ 著作図書案内・書評・海外シンポジウム参加報告記事募集

ニュースレター(NL)委員会では、次回33号(2018年6月発行予定)掲載記事として、会員の皆様の著作図書案内、海外シンポジウム参加報告、震災関連や多文化関係学会に関連した研究、関連学会参加報告記事などを募集しております。以下(1)から(3)の記事をNL委員会に送ってくださいますようお願いいたします。

#### 募集する記事の内容

- (1) 学会の趣旨に関連すると思われる著作・訳書などを出された場合  
募集対象とする著作の発行時期:2018年1月から2018年4月末まで  
書名、著者名、出版社名、出版年、総ページ数と本の内容を200字以内で紹介
- (2) 学会の趣旨に関連すると思われる著作で、会員に広く紹介することが望ましいと思われる場合  
募集対象とする著作の発行時期:2018年1月から2018年4月末まで  
書名、著者名、出版社名、出版年、総ページ数と本の書評を200字以内でまとめる
- (3) 学会に関連する海外のシンポジウムや震災関連のシンポジウム、もしくは関連学会に参加された場合  
募集対象とする時期:2018年1月から2018年4月末まで

◆ 記事の送付期日:2018年5月6日

◆ 記事の送付先:NL委員会 内藤 伊都子宛 itnaito@ed.tokyo-fukushi.ac.jp (全角の@を半角の@に変更してください)

### ■ 関連学会の大会紹介記事の募集

会員に紹介するのにふさわしい関連学会の大会情報を随時募集しております。具体的には、(1)学会名、(2)大会名、(3)大会テーマ、(4)大会日時、(5)会場、(6)その他詳細(120字以内)をお書きのうえ、NL委員会委員長の 内藤 伊都子宛 itnaito@ed.tokyo-fukushi.ac.jp (全角の@を半角の@に変更してください) に送ってくださいますようお願いいたします。

(NL委員会委員長 内藤 伊都子)

## 編集後記

ニュースレター第32号をお届けいたします。学会活動に関する最新の情報につきましては、学会ホームページを見ていただくのが早くて便利だと思いますが、年次大会の募集から総括まで、あるいはジャーナル投稿から発行までのように、活動全体の流れをまとめて知るには、ニュースレターをご覧いただくのが便利かと思います。次回大会(相山女学園大学開催)の内容につきましても、6月発行予定の次号ニュースレターで詳細にお伝えする予定ですが、それまでは学会ホームページの情報をご確認いただければと思います。

(NL委員会:内藤伊都子・守崎誠一)